

大学院教育学研究科に対する志願者の期待と修学への志向について

平成 26 年度大学院運営委員会 委員長
堀内 かおる

1. はじめに

教育学研究科は、教育デザインコースと特別支援教育・臨床心理学コースを擁する一専攻である教育実践専攻として平成 23 年度に改編され、今日に至っている。本研究科の特色は、その理念に掲げている「実践性」にある。

この「実践」とは、学校現場における営みのみならず、多元的価値に基づく知識基盤社会にみられる諸課題に対峙し「現場」との往還を通して理論を意味づけ、実践を通して現代的諸課題を解決する知と方法を「現場」に還元することをめざすという理念のもと、独自性の高いカリキュラムを位置づけてきた。特に、研究科共通のコア科目である「教育デザイン」と、「教育デザイン」を現場で検証し大学における理論化を図る「教育インターン」という実践的な科目を 2 本の大きな柱は、教育現場と大学との往還の学びの象徴ともいえるものである。

教育インターンにおいて学生たちは、神奈川県下の学校現場をはじめとする諸機関・施設におけるフィールドワークを通して現場から学び、研究成果を現場に還元すべく、研究活動を進めている。

本稿では、本研究科に対する志願者のニーズの動向を把握するために実施したアンケート調査をもとに、本研究科に対する進学希望者が本研究科をどのようにとらえており、どのような期待が寄せられているのか分析し、本研究科の今後のあり方について検討する際の資料を得ることを目的とする。

2. 方法

2-1 調査の概要

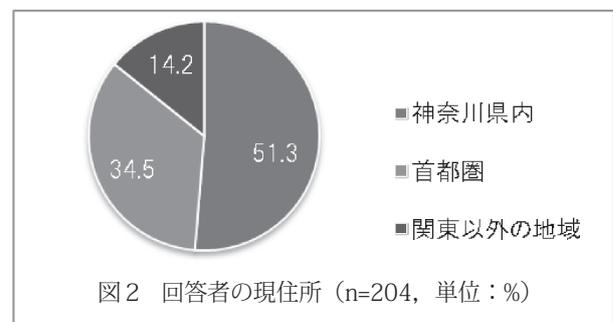
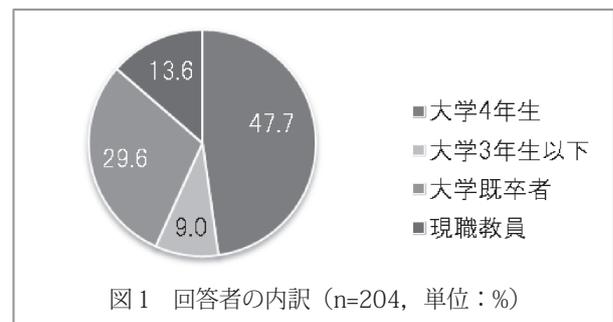
2014 年 6 月及び 8 月に、大学院入試説明会を実施した。本研究科では、7 月に現職教員を対象とした推薦入試、9 月に一般入試を行っている。6 月の説明会は推薦入試及び一般入試の受験希望者が参加した。

8 月の説明会には一般入試の受験希望者に加えて、来年の受験を考えている大学 3 年生以下の者も参加した。

これら 2 回にわたる大学院説明会への参加者に対し、本研究科に対する期待や受験意思などを問うアンケート調査を実施し、合計 204 名からの回答が得られた。

2-2 回答者の属性

大学院説明会参加者の内訳は、図 1 のとおりである。また、これらの説明会参加者の現住所は神奈川県内が過半数を占めている（図 2）。



大学院説明会開催の情報は、主として大学のウェブサイト (HP) で知ったという者が約 9 割を占めた (図 3)。

また、教員免許の有無を尋ねたところ、「あり (今年度で取得予定を含む)」が 41.7%、「なし」が 58.3% であり、教員免許を所有している (および取得予定) 者は 4 割ほどであった (図 4)。

以上の結果から、教員免許の取得を希望している者や研究者志望の者が多い可能性が考えられる。研究の方法論を身につけ、教育的マインドを根底に持ったスペシャ

リストの養成は、本研究科の特色であると言えるだろう。

3. 結果と考察

3-1 進学希望の傾向

次に、進学希望の程度を尋ねた結果を図5に示す。

「第1志望でぜひ入学したい」と回答した者は約7割、本研究科が第1志望ではないという者が約3割である。就職に失敗したら大学院進学を考えると言う者はごくわずかであり、第1志望で本研究科を受験する可能性がある者は204名中7割ということで、140名ほどになる。

志願するコース・領域／専修については、図6に示す結果となった。臨床心理学コースの志願者が27.0%と突出しており、教育デザインコースの各領域については、多くの領域で約5～10%を占めている。

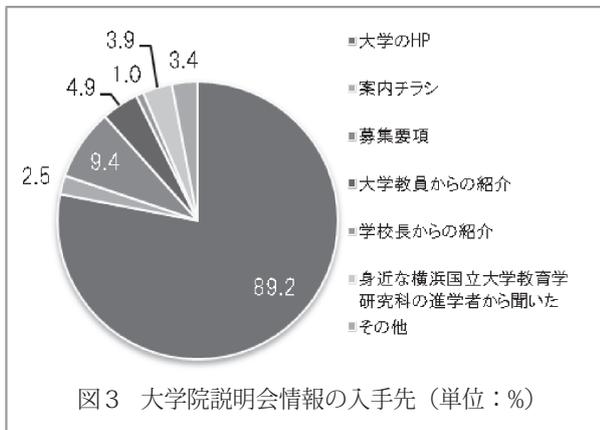


図3 大学院説明会情報の入手先 (単位：%)

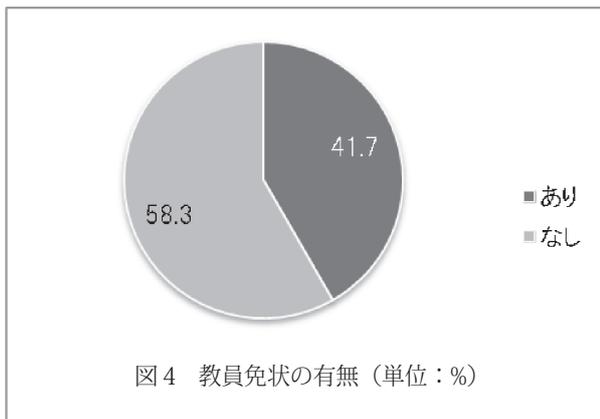


図4 教員免許の有無 (単位：%)

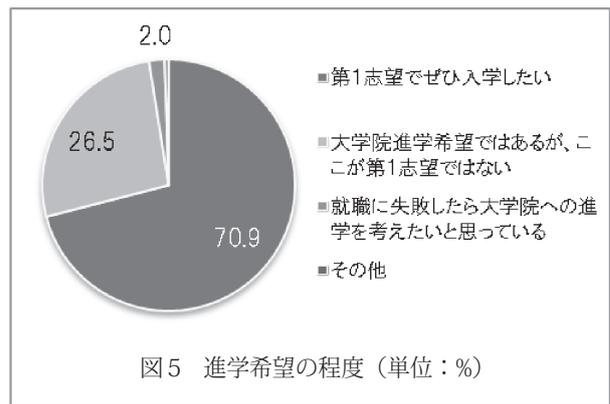


図5 進学希望の程度 (単位：%)

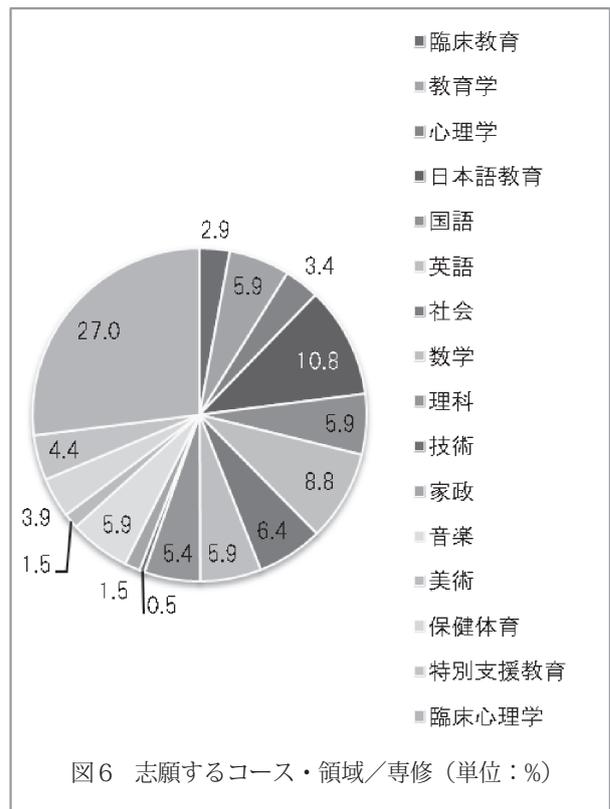


図6 志願するコース・領域／専修 (単位：%)

3-2 志願者から見た教育学研究科の魅力

志願者が本研究科のどのような点に魅力を感じているのかたずねたところ、図7に示す結果が得られた。

約6割の者が「教育現場に根ざした実践性ある研究が行われているところ」と回答しており、突出した傾向を示した。このことは、本研究科の特色である「実践性」が評価され、そこに魅かれて本研究科を志願する者が少なくないということを表している。次いで、「教科の教育について深く学べるところ」「少人数によるきめ細かい指導が受けられるところ」が3割台を示した。そのあとは、教科教育の分野、教育学や心理学の分野で「著名な教員の指導が受けられる」こと、「専修免許状が取

得できるところ」、「自分の専門のみならず、幅広い分野の授業が履修できるところ」といったカリキュラム上の特性が評価されている。

また、「横浜という地」や「横浜国立大学」というブランド力に魅かれるといった回答も約2割ほどあった。

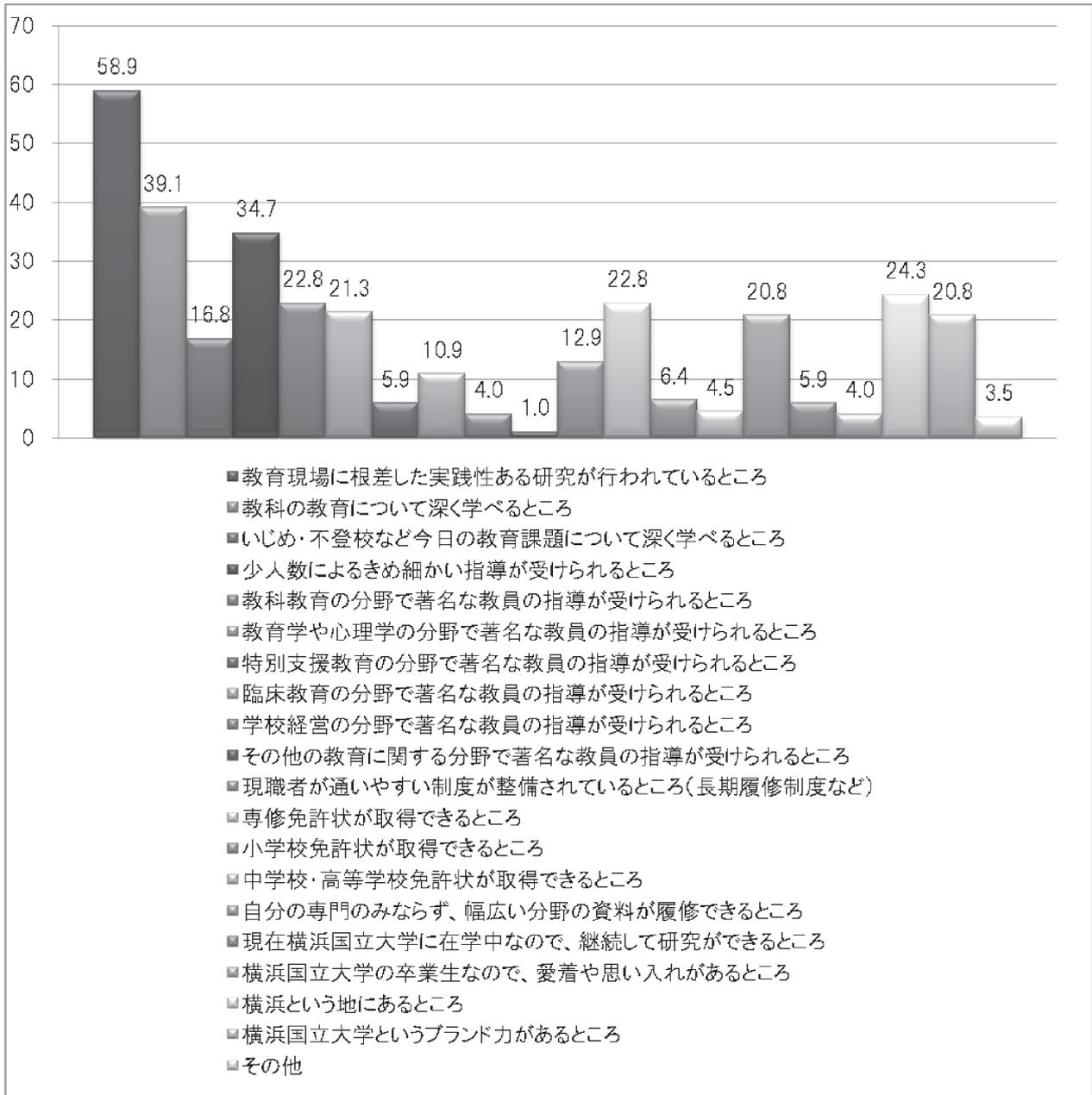


図7 教育学研究科の魅力(単位: %)

3-3 教職大学院への志向性

次に、教職大学院が設置された場合、どのくらい入学希望者がいるのか見ていく。

「教職大学院ができた場合、そこに入学したいと思えますか」とたずねたところ、図9のような結果が得られた。

まず、「ぜひ入学したい」と回答した者は28.8%、「現行の研究科で教科内容や研究手法を追究したい」と回答した者は26.6%で、ほぼ二分された。それ以外の44.6%は、「どちらともいえない」と回答している。

それでは、教職大学院進学を希望する48名に限り、どのような内容を特に究めたいのかたずねたところ、図

10 および図 11 に示す結果となった。

現在大学在学中の学生は、「児童・生徒理解に関する内容」について究めたいと回答した一方で、現職教員は「教科に関わる内容」を志向し、教員以外の既卒者については「学校経営に関わる内容」を究めたいというように、有意な差が見られた。現職教員にとっては、大学院進学目的として、専門とする教科の内容や指導法についての最新の動向を把握し、指導者としての力量を高めたいと考えているのであろう。学生にとっては、大学を卒業してすぐ教員になるのではなく、その前に児童・生徒理解について十分な研さんを積み、子どもへの対応や関わり方について学んでおきたいと考えたと推察される。

教育学研究科については、現在、今後の教職大学院の設置に向けた検討を重ねている。現職教員ならびに学部から進学するストレートマスターの大学院生それぞれに固有な課題と進学への志向性を加味しながら、地域のニーズに応え得る、よりよい大学院のあり方を構想していきたい。

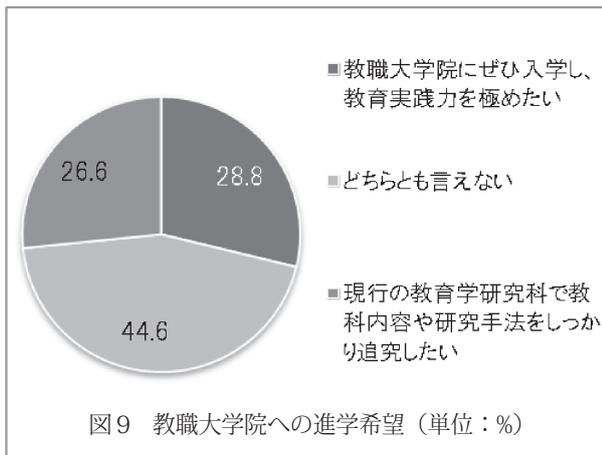


図9 教職大学院への進学希望 (単位：%)

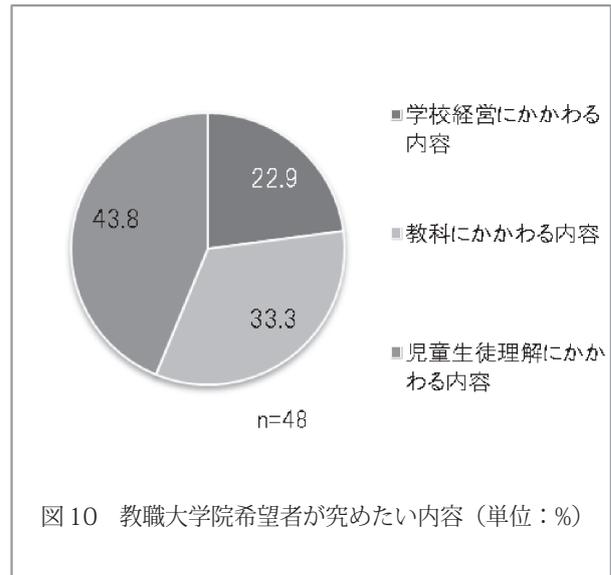


図10 教職大学院希望者が究めたい内容 (単位：%)

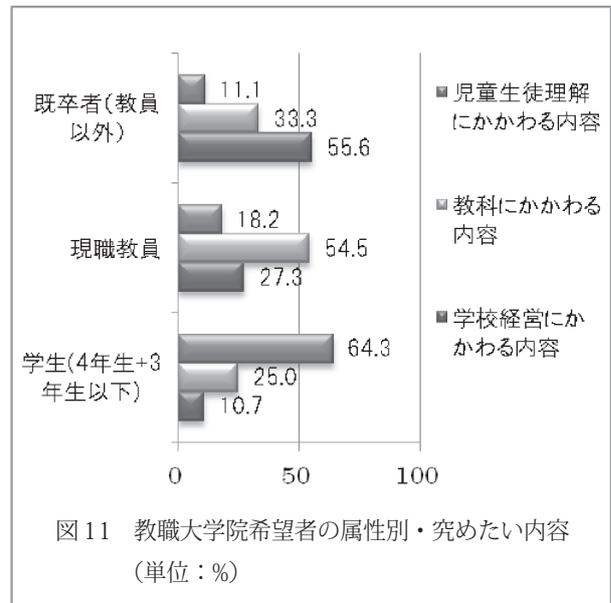


図11 教職大学院希望者の属性別・究めたい内容 (単位：%)